

令和5年度 三重大学教育学部附属中学校 学校関係者評価

	本年度の活動	具体的な手立て	成果と課題	学校関係者評価	今後の改善点
（日々の研究・公開研究会） 教育研究	<p>研究メインテーマ「社会の変化に対応できる生徒の育成」～SDGsを核としたカリキュラムマネジメントの実現～の研究発表会を実施する。</p> <p>・研究部にも大学の先生方を積極的に招聘し、11月の研究発表会に向けた準備を行う。</p> <p>・5月、7月、11月の3回、授業研究会やプレ公開、研究発表会を行う。</p>	<p>・研究紀要を作成・配布し、本研究の集大成を発表する。また、研究発表会の場において広くご意見をいただき、次年度以降の研究内容に活かす。</p> <p>・育成したい資質・能力について、「まなびスケール」を活用し、教員間で共通理解を図りながら研究を深めていく。</p> <p>・大学の先生方に各教科等の授業についての指導助言を仰ぎ、授業力の向上を図る。</p> <p>・週1回程度、各教科で教科部会を定期的に行い、資質・能力の向上をどのように進めるか研究を進める。</p> <p>・文部科学省、三重県教育委員会等が開催する研修会や他附属の公開研究会に積極的に参加する。</p>	<p>【成果】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・11月4日に開催した教育研究発表会には、三重県内外から200名を超える参加者にお越しいただくことができ、本校の研究を広く知っていただく機会となった。 ・記念講演をいただいた國學院大學教授 田村学先生から多くの示唆をいただくことができた。 ・研究内容において、資質・能力の伸びを生徒自身が実感することができた。 ・本次研究を進めるにあたり、附属学校の強みを生かし大学の先生方に多いに関わっていただけた。特に「総合的な学習の時間」のカリキュラム作成には三重大学教育学部の村田先生、前原先生に多くのご助言をいただくことができた。 <p>【課題】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・どのような生徒の育成を目指すのかという点で、学校教育目標と研究の目標とで「つながり」があまり見られなかったことは大きな改善点であるといえる。次の研究テーマを検討する際、学校教育目標を出発点として、目の前の生徒の実態を踏まえて、育成したい資質・能力の設定を行っていくべきである。 ・各教科の授業における「板書のあり方」に改善が必要。黒板等を用いた「静的な」板書と、スクリーンを利用した「動的な」板書の使い分けを授業者が検討していかねばならない。 ・他校の研究会や学会への参加について、その回数・頻度に教員間で大きな差が生じている。 	<p>・今年度、対面による公開研究会を実施し、開会行事における生徒の素晴らしいSTEP発表を含め、多くの参加者にその成果を公表することができたのは成果といえる。</p> <p>・今後も、ここで示されたような研究活動を積極的にに行い、公開研究会を定期的に開催し、その成果を公表していくことが県内中学校の教育の質向上にもつながり、それが附属中学校としての大きな役割であると考えている。</p> <p>・また、生徒や保護者の皆様にも他校にはない大学の附属学校であることのメリットを感じてもらえるような授業や研修が豊富であれば良いと思う。</p> <p>・一方で、附属中の授業研究が公立学校の授業づくりと乖離したものとならないために、先進的な取組を行っている公立学校の公開授業や研究会等に積極的に参加し、他からの学びも取り入れていくことも必要であると感じる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・新型コロナウイルスの影響を受け、本次は3年という研究期間であったが、従来通り2年という期間に戻すべき。本公開までに「プレ公開」等を複数回開催することで進捗状況の周知と助言をいただける場を設けたい。 ・総合的な学習の時間を核とした教科等横断的なカリキュラムを組むために、早期の計画・作成・職員間の合意が必要となる。 ・より多くの生徒が「探究」活動に意欲的に取り組めるよう、テーマ決定に至るプロセスに重点を置き、そこに時間を費やしたい。 ・本校主催の公開研究会に多くの参加者を集めたいのであれば、広報活動（他校の研究会へ参加し名刺交換、出版社への広告依頼等）に注力していくべき。 ・「主体的に学習に取り組む態度」の育成が最大の課題であることを考えると、ゼロベースで探究のテーマ設定を行わせていきたい。
学習環境の整備	<ul style="list-style-type: none"> ・1人1台タブレット端末の積極的で効果的な使用 ・デジタル・シティズンシップ教育の推進 デジタルツールを用いて責任ある市民として社会に参画するための知識や能力を育成する。 ・施設整備については、大学と連携をとり優先順位を明確にし環境改善に努める。 ・働き方改革を推進する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・普段の授業だけでなく、休み時間や部活動でも必要に応じて使用させる。 ・タブレット端末使用中に分かってきたことを生徒と教員で共有し、改善に努める。 ・「発信する力」を育成するために、新たなプロジェクトを開始する予定。 ・事務職員等とも連携し、限られた予算の中で環境改善を図る。 ・毎週水曜日の定時退校日をさらに定着させ、業務のスリム化を図る。 	<p>【成果】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・休み時間に写真や動画、ゲームなどを通じて会話が増える場面が見られた。 ・タブレット端末の活用により、授業数を圧迫していた決めごと（部屋割りや学級役員など）をスムーズに終えることができた。 ・全クラスへの吊り下げテレビの設置により、スライド資料などの提示が行いやすくなる。 ・高校入試や資格試験などの可否発表を自分たちで確認するなど授業以外でもタブレットの活用を進めることができた。 ・定時退校日が定着し、教員の退勤時刻が全体的に早まっている。 <p>【課題】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・タブレット端末自体を破損するケースが多い。 ・他者が嫌な思いをする使い方がときどき見られる。 ・「発信する力」を育成するための新たなプロジェクトが開始できなかった。 ・業務内容の精選を継続して行い、働き方改革をさらに推進していく。 	<ul style="list-style-type: none"> ・タブレットが日常の学習活動に活かされていることから、さらに有効活用するための研究が望まれる。 ・発信の仕方や情報、ネットモラル等のより良い使い方について生徒とともに考え、タブレットやスマホなどによる誹謗中傷等、いじめにつながるような望ましくない使われ方がされないように倫理面での指導をするとともに、未成年を標的にした危険なサイトや犯罪行為などにも注意喚起を行い、デジタルシティズンシップ教育の推進をしていただきたい。 ・教職員アンケートより肯定的な回答率の増大は評価できるが、勤務時間の長さには課題が見られるため改善をしていただきたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・タブレット端末を自由に使える環境を提供することを継続する。 ・タブレット端末使用者としての自覚・責任を意識できる学校づくりを推進する。 ・業務削減のカギになるのはクラウドでの共同作業・同時編集なので、PDFで原本データを残しつつ、会議ではWordでその場で編集できる状態が望ましい。
教育実習	<ul style="list-style-type: none"> ・教育実習を円滑に実施するために、大学との連携を一層深める。 ・実習生の指導を通して、教師自身の指導力向上に努め、生徒理解力を高める。 ・教職大学院生の実習を積極的に受け入れ、充実させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・本年度は、6月2週間(10日間)及び9月に4週間(19日間)の実習を行う。事前指導は、リモートや対面で丁寧にやりとりをして実習開始までの指導を計画的に行う。 ・教育実習の期間を研究の一環として位置づけ、実習生の教科指導・学級指導を通して教師自身の授業を振り返り、実習生の授業参観を通して生徒を多面的に観察する。 ・教職大学院生に実習計画と予定を与え、効率的に取り組ませる。 	<p>【成果】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本年度から実習期間も通常に戻り道徳授業の実習も再開されたことで充実し、指導案検討などの中で実習生同士のつながりも増やすことができた。 ・大学と協議し実習日誌の記入の仕方を変更したことで、実習生に教科指導だけでなく学級指導へも意識をもたせることができた。 ・4w実習生は、対面で講義を受けている学生たちであることから、教育実習をする上で多くの実習生がコミュニケーション能力に長けており、過去3年の間で一番指示が通りやすく成長度合いも高いように感じた。また実習が始まってからの辞退者がいなかった。 ・Teamsなどを使いこれまで効率化を図ってきたが、教員・学生ともに困難なく使用できるようになっている。 <p>【課題】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・新型コロナ、インフルエンザ、O-157と感染症に罹患する学生が多く、早退や欠席することに対する対応が大変であった。欠席連絡なども大学からの提案では煩雑な部分があるため、今後、大学と協議を重ね変更したい。 ・大学2年生も参加する特練において体調不良者のケアを本校教員が対応することになり、人員が割かれた。 ・学生に対する配慮事項などが不明のため、大学の担当者との対応について大学側と協議していく必要がある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・教育実習が従来の形に戻り、生徒と学生、指導教員の三者にとって良いものになったのではないかと。 ・教員を目指す学生が減る中で、ぜひとも教員という職業の大変さとともに、楽しさ、おもしろさ、やりがい等を伝え、教職の道へと導いてやっていただきたい。 ・実習中の学生の出欠や配慮事項等、個々への対応の煩雑さは早急に大学と附中との間で改善に努め、先生方の負担軽減をしていただきたい。 ・提案として実習期間だけでなく、大学の講義等が空いている時間に中学校で生徒と触れ合う機会を提供できるとよいのではないかと。 	<ul style="list-style-type: none"> ・2022年度から「未来の教師と現職の教師が語る会」が始まり、大学1年次から教員になることを意識することができるので、3年次の教育実習までの準備がしやすくなるのではないかと予想される。 ・R6年度から実習生と中学校と大学間の連絡（出欠報告）や書類（実習綴りや報告書類）などオンライン化・デジタル化していくため、利便性も考慮しつつ大切なことを見落とさないよう行っていく必要がある。 ・実習期間以外での大学生と生徒との交流する機会についても検討していけるとよい。

令和5年度 三重大学教育学部附属中学校 学校関係者評価

	本年度の活動	具体的な手立て	成果と課題	学校関係者評価	今後の改善点
キャリア教育	<ul style="list-style-type: none"> キャリアパスポートを活用して汎用的能力を高める。 進路適性検査による生徒自己理解、職業調べの交流を通じての様々な職業機会の学びをふまえた、自己の将来について考える機会を設定する。 個々の発達段階に応じて年間を通して面談を行う。 コロナ禍も収束したことから、道德、特別活動、総合的な学習の時間において外部機関や施設の効果的な活用を図るとともに、計画的・系統的に行い、充実を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> キャリアパスポートを活用し、年度や学期の節目で、めあての設定・確認、自らの取組の振り返りを中心に指導・支援する。 教育相談、進路相談の実施(全学年) 働くことの大切さについての学びの授業(1年) 職業調べ、SDGsに関わる体験学習等の実施(1年) 三重大学への校外学習の実施(2年) 命を大切に授業、幼稚園訪問の実施(3年) 進路希望調査の実施、オープンスクール等への参加、進路説明会の実施(3年) 学部と附属学校教員との連携授業の活用(全学年) 	<p>【成果】</p> <ul style="list-style-type: none"> キャリアパスポートの取組は、どの学年も毎学期、始めに目標設定し終わりに振り返りを行い、定着して実施ができた。 修学旅行(3年生)、校外学習(1,2年生)は実施可能な方法を模索して、工夫して実施した。 1年では講師を招いて、「アナウンサーに学ぶプレゼンテーションの極意」の学習を、2年では三重大学での校外学習と修学旅行に向けた平和学習を、3年では附属幼稚園と連携した保育実習を実施した。各学年で外部とつながる取組を実施できた。 三重大学の教員と附属中の教員が連携しあう授業がどの学年でもできている。 <p>【課題】</p> <ul style="list-style-type: none"> キャリアパスポートを作成することだけが目的となっている感があり、効果的な活用を検討していく必要がある。 生徒の成長段階を見据え系統立てた、取り組みやすい内容にしていくことも必要である。 教科によって三重大学との連携に差があるため、連携を広めるための工夫を模索したい。 	<ul style="list-style-type: none"> 社会の進展に伴い、キャリア教育をどのように進めていくのかは悩ましいことであるが、社会情勢に目を配りつつ、生徒たちにとって有益な情報に基づく指導に努めてほしい。また、まもなく三重県文化振興計画が策定されるため、県の伝統産業や文化について伝えていくことも意義あると考える。 三年間を通じて学校外の社会や多くの職業人と直接出会う機会を意図的に計画し、キャリアパスポート等を活用しながら発達段階に応じて推進していただきたい。 「学校は学習や進路に関する情報を提供している」という項目の生徒アンケートについて、2年生は60%もの生徒が否定的回答をしており、次年度は最終学年となることから積極的な取り組みをお願いしたい。 	<ul style="list-style-type: none"> 校外学習や就学旅行など、進路学習はしっかりと計画されていて、効果的に学習できていると思うが、キャリアパスポートを十分に活用できているとは思えない。もっと魅力的なキャリアパスポートに改善していく必要があるのではないかと考える。 これまで修学旅行や校外学習など、制限されていた活動が随分とできるようになったので、外部機関と積極的に効果的に繋がってほしい。 進路通信を誰でも見られるように、附属中学校のHPに掲載していたが、あまり認知されなかったように思う。情報発信の仕方等も考えていきたい。 1・2年生は進路について『まだまだ先の事。』とされていて、積極的に情報が欲しいと思っている生徒は少ない。興味をあまり持っていないのでアンケートの結果も悪かったのではないかと。1・2年生の早い段階からもっと進路について考えさせ興味を持たせる様に考えていきたい。
教育相談 生徒指導	<p>【生徒指導】</p> <ul style="list-style-type: none"> 『つながりあう個』の理念のもと、一人ひとりを大切に、教職員が同じ方向性をもって生徒を育てる。 いじめの未然防止と早期発見・早期対応に努める。 生徒指導部を中心に、全校での指導体制づくりと情報共有を行う。 教職員と生徒との間に良好な信頼関係が築き上げられるように、日々、適切なコミュニケーションを行う。 <p>【教育相談】</p> <ul style="list-style-type: none"> 学校生活における生徒の悩みや思いを把握して生徒理解に努める。 不登校生徒の困り感の把握に努め、不登校生徒への対応を学校全体で進める。 教育センター等の外部相談機関との連携を進めるとともに、不登校生徒の学習機会を多様な形で確保する。 	<p>【生徒指導】</p> <ul style="list-style-type: none"> 生徒一人ひとりが「自己決定する場」を多く設定し「自己存在感」を与え、生徒間または生徒と教師との間で「共感的な人間関係」を築く。 附属学校園いじめ防止基本方針及びいじめ防止対策年間計画について共通理解を図る。情報リテラシー、ネットモラルの指導を充実させる。 生徒指導部を週1回開催し、情報共有・共通理解を図り、統一した指導を進める。 日頃から生徒との対話の機会を大切にするとともに、四附属で連携したあいさつ運動を行う。 <p>【教育相談】</p> <ul style="list-style-type: none"> 全校生徒を対象とした計画的な教育相談と、困り感のある生徒に寄り添ったタイムリーな教育相談を行う。 SC、養護教諭、三重大学・津市子どもセンター・附属学校園特別支援教育支援室と連携しながら、不登校生徒の困り感の把握に努め、継続的な教育相談及び支援を行う。 	<p>【生徒指導】【成果】</p> <ul style="list-style-type: none"> 週1回部会を開催し、情報共有や共通理解を図り、職員全体で日々生徒に接することができた。トラブル対応も、その都度適切に対処を行うことができた。 日々の生徒との対話も大切に、関係作りを築くことをすすめることができた。生徒会とも連携し、生徒主体の活発な活動を進められている。 <p>【課題】</p> <ul style="list-style-type: none"> 不登校生徒が多く、安心安全な学校づくり、生徒間や教員との関係づくりに課題があると考えられる。アンケートにおいても「先生に気軽に相談している」の項目が低く出ており、そのような思いを持っている生徒がいることを踏まえ生徒との関わり方を考えなければならない。 <p>【教育相談】【成果】</p> <ul style="list-style-type: none"> 各学期に1回教育相談週間を設け、担任の先生と話す時間を設定することができた。その中でSC(スクールカウンセラー)へ繋ぐなど迅速な対応ができた。また相談の内容によっては、継続して生徒の見守りや声かけ、保護者との家庭連絡を密にした協力体制を作ることができた。 <p>【課題】</p> <ul style="list-style-type: none"> 友人関係や親子関係で悩む生徒が以前よりも増加傾向にある。SCや生徒指導部と連携をより図りつつ、相談や支援体制を整えることと、教職員がカウンセリングマインドを常に意識しながら生徒と関わる機会を増やし、些細な変化をとらえ悩みを抱える生徒の早期発見に努めたい。 附属中に在籍の企画経営室コーディネーターを活用し、困り感のある生徒の支援やSCとは別の観点で保護者の教育相談が実施できる体制づくりにも取り組みたい。 	<ul style="list-style-type: none"> 「つながりあう個」の理念のもと先生方にはいじめ防止や日々の生徒対応等、本当に一生懸命取り組んでいただいていると感じるが、一方で不登校生徒が増加傾向にあり、生徒アンケートからも「一人ひとりが大切にされている」や「先生に気軽に相談できる」に対し否定的な回答している生徒が一定数いる状況は憂慮される。 生徒や保護者との信頼関係を構築することに近道はないが、教職員がカウンセリングマインドを持ち、生徒指導のあり方を改善するとともに、日々のやり取りの中でSCや企画経営室コーディネーター等の専門家と連携を深めながら、根強く努力を継続していただきたい。 本校生徒の特長として、小学校時代の人間関係や保護者からの過度な期待など、ストレスがあり、近年、そのストレスがより強くなっているのではないかと。生徒が先生に相談する＝自分の弱みをみせる＝恥ずかしいこと、と考える生徒が少なからずおり、そのような生徒は生活背景まで理解して生徒指導にあたっていかないとなかなか心を開いてくれないのではと思う。 	<p>【生徒指導】</p> <ul style="list-style-type: none"> 引き続き、生徒指導体制を明確にし、各学年の担当者を中心に学校全体を見ていくことで先行的な生徒指導につなげていく。 アンケートの結果から、カウンセリングの方法を知るために、専門の先生を招聘し講習会を行う。それにより、教員が正しい対話の方法を習得できるようにしたい。 <p>【教育相談】</p> <ul style="list-style-type: none"> 教育相談週間に限らず、常に生徒が誰にでも相談できる雰囲気作りや関係性を築きたい。そのためにも教職員がカウンセリングマインドを持ち、デイリーノートのやりとりにもできるだけ丁寧にコメントを返したり、日頃の生徒の様子を生徒指導部と連携しながらしっかりと把握していきたい。また相談内容については担任・副担任・学年での共有を密にし、部活動や委員会活動での関わりも含め、学校全体で個々の様子を把握していくことが大切である。そのためにも日々の記録を残すとともに支援部会での情報共有や職員会での提案・発信を行ってきたい。
道德教育	<ul style="list-style-type: none"> 各学年ごとに年間指導計画を作成し、生徒の実態にあった指導方法の工夫、考える道德、話し合う道德についての実践を重ねる。特に、命を大切にすることを教育を推進する。 学年全体で道德心を育てていく体制をつくる。 道德教育推進教師を中心に、学校全体で適切な評価のあり方について研究する。 	<ul style="list-style-type: none"> 道德科との関連を意識しながら、各教科における道德教育のねらいを明確にし実践する。 生徒情報を密に交換し、実態を把握した上で指導案を検討する。学年の担当教員が全員で道德の授業を行っていく。 定期的に学年相互の授業参観を行う。事後検討会により指導の改善を図る。 研修会への参加や先進校への視察により、道德教育の研修を深める。 	<p>【成果】</p> <ul style="list-style-type: none"> 学年の実態に応じて授業を行い、実際に起こっている事象を取り上げることで、生徒の意識が少しずつ変容してきている。(学年の課題など) 去年に引き続き各学年で、担任だけが授業をするのではなく、学年全員で道德教育を行うことができた。それにより、授業者以外の視点から生徒の様子を見ることができている。 テーマを与え、生徒自身に話し合わせることで、お互いの意見を尊重しつつ、自己の考えを深めるようとする姿が見られるようになった。 ロイロノートを活用し道德の振り返りを行うことで、生徒の振り返りを学年教員間で共有しやすくなった。 <p>【課題】</p> <ul style="list-style-type: none"> 今年度は、研修会への参加や先進校の視察があまりできなかった。 生徒の素の意見を出させるため、導入にいかん生徒にとって身近な課題を設定するか教材研究していく必要がある。 担任と副担任の授業の組み方が学年によって異なるため、学校で統一していく必要があるかもしれない。 	<ul style="list-style-type: none"> 担任だけでなく、学年全員で道德教育を実践できたことが生徒アンケートの「学校では命の大切さや社会のルール、人権について学ぶことができる」の肯定的回答の高さによく表れており評価する。同学年の生徒を複数の教員が目配りし、指導にあたることにも教員同士で情報交換する体制は好ましいことである。 課題で述べられていることを解決しつつ、この取り組みを継続してください。 	<ul style="list-style-type: none"> 担任と副担任の授業の組み方は、基本担任と副担任が交代で進め、学年の生徒の実態に応じて変更をしても良いものとした。 生徒の実態に応じて教材の内容について考え、学年で検討していくようにしたい。 他校の視察については、難しいところもあるため、実践をホームページなどで調べたりして情報を集めていければと考えている。

令和5年度 三重大学教育学部附属中学校 学校関係者評価

	本年度の活動	具体的な手立て	成果と課題	学校関係者評価	今後の改善点
特別教育支援	<ul style="list-style-type: none"> 生徒一人ひとりの実態を踏まえ、本人・保護者の思いやニーズを把握しながら、長期的な視点に立って、適切な対応を図る。 困り感を抱える生徒や不登校生徒に対して三重大学・津市子ども教育センターとの連携を深め、個別支援の手立てを考えていく。 SC(スクールカウンセラー)と連携し、より効果的な支援を推進する。 	<ul style="list-style-type: none"> 特別支援部会を週1回開催し、SCや三重大学・津市子ども教育センターやコーディネーターとの情報共有を図る。 特別な支援が必要な生徒について、個別の支援計画を作成し、学習の支援や自立を目指した活動の時間の場面を設定する。 適宜ケース会議を実施する。 1学年と特別支援学校との交流会を通して生徒同士の相互理解を進める。 	<p>【成果】</p> <ul style="list-style-type: none"> 部会では生徒の情報共有や管理職、企画経営室職員から教育センター内ほほえみ教室に通う生徒の状況や支援方法等についてのアドバイスをいただくことができた。登校できていない生徒に対しては、ほほえみ教室や附属中での週2回の別室支援を紹介しながら登校を促す判断ができた。 SCと連携し、保護者や生徒の情報を的確に把握し、直近で必要となる取組の相談や専門機関との連携ができた。 個別支援では進路に向けた学習に取り組めた。 特別支援学校との交流会は1年生と3年生で行うことができた。事前指導も含め、インクルーシブの視点でお互いの特性を理解しながら関係を築くことができた。 <p>【課題】</p> <ul style="list-style-type: none"> 昨年度計画していた不登校生徒や保護者対応に対する研修会については、今年度も開催できていない。 不登校生徒だけでなく、教室にいる学力不振の生徒や対人関係に課題を抱える生徒に対して、個別の支援計画を作成しているものの、うまく活用することができていない。 保護者の思いや願いを十分聞き取ることができず、教員側の判断で生徒の対応をしているケースが見られる。 	<ul style="list-style-type: none"> 不登校生徒が増加傾向にある中、敷地内にはほほえみ教室ができたことで、生徒が支援を受けやすくなりよかった。 学力不振・対人関係・不登校等の課題を抱え、支援を必要としている生徒に寄り添うことは無論であるが、保護者の悩みや願いを十分に理解して共に支援教育を進めていく姿勢を大切にしていきたい。 部会で情報共有しても、それが教職員間で共有されてなければ個別最適な支援はできず、発達に課題のある生徒にとっては学校生活での困り感の改善につながる。学年会議の事項書に項目を入れるなどして全員が同じ指導や支援ができるようにしてほしい。 	<ul style="list-style-type: none"> 生徒の欠席が連続(2・3日)するようになった初期の対応を迅速に実施し、長期化に移行させない取組を実施したい。対応方法について統一したものを支援部会で検討していきたい。 日々の欠席や生徒の様子を注視しながら、ほほえみ教室の紹介を促したり、学校へ登校できるようになるための手立てを支援部会で共有していきたい。支援部会では生徒の情報共有を目的として、1時間内で3学年分全員を共有することは難しいが、紙面での共有と、具体的な支援の手立てに焦点化して、今後はケース会の設定等打ち合わせも視野に入れながら協議をしていくことを検討していきたい。 スクールカウンセラーからの情報やほほえみ教室での様子を学年で共有し、保護者や本人の願いに寄り添いながら、学年での手立てをしっかりと考え、ほほえみ教室や学校全体としての具体的な支援を考えていきたい。 不登校生徒への家庭連絡での内容や、関わった際の様子や日々の記録を残していく。 支援部会を開く前に、各学年の状況を十分集約して開催し、開催後は協議・確認された内容をしっかりと学年で共有するといった運用を実施したい。
国際理解教育	<ul style="list-style-type: none"> 教科や各学年、生徒会執行部や国際福祉活動部を通して、津ユネスコ協会への活動参加やESD教育に取り組む。 デジタルツールを活用した国際交流と協働学習 インドネシアの学校とオンラインで繋がり、協働学習を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ALTがさらに授業に関わる機会を増やす。そのために、ALTが授業者の一人として責任を持てるよう、ALTとの授業打ち合わせを綿密にしていく。 オンラインを活用し、海外の生徒との交流を予定。その交流を通して、生活の中に英語を使用する場面を創造する。 	<p>【成果】</p> <ul style="list-style-type: none"> 各学年の英語科担当がALTと授業についての協議を密に行うことができた。 インドネシアの学校と国際交流を実施することができた生徒が限定的であったので、次年度以降はその参加人数を増やしていきたい。また、国際交流を体験した生徒から生徒全体へ還流報告等を行い、学校全体としての取組になることが望ましい。 生徒が三重県青少年赤十字中学校連絡協議会(国際交流会)に参加し本校の取組を広く伝えることができた。また、ユネスコスクールとしてSDGs達成に向けたSTEPでの研究活動を推進することができた。 デジタルツールを活用し、計3回にわたりにインドネシアの学校と協働学習を実施することができた。(にこPプロジェクトへの参加) <p>【課題】</p> <ul style="list-style-type: none"> インドネシアの学校と国際交流を実施することができた生徒が限定的であったので、次年度以降はその参加人数を増やしていきたい。また、国際交流を体験した生徒から生徒全体へ還流報告等を行うことで、学校全体としての取組になることが望ましい。 	<ul style="list-style-type: none"> インドネシアの学校と国際交流を実施できたことは評価できる。 昔と比較して今の子供たちのITスキルは比較しづらいレベルである一方、英語能力を始め国際感覚はあまり変わっていない印象である。一番の違いは、おもしろさや必要性を感じて本人達が学校で教わる以上の時間を費やしているか否かであると思う。本人達がいかに自主的に学ぶきっかけと環境を与える事が学校の主たる目的になるのではないかと。 今後、交流できる生徒を増やすとともにインドネシアに限らず、様々な国の子どもたちと交流する機会が増えていくことを期待します。 	<ul style="list-style-type: none"> ALTがあくまでも英語科の一員であることを踏まえ、授業づくりだけではなくテスト作成や採点業務等も一部任せていきたい。また、同僚として職員全員が信頼関係を構築するために、日頃からコミュニケーションを図ることを意識したい。 ユネスコスクール、三重県青少年赤十字の一員として、社会に向けた取組を継続して推進していくべき。 海外の学校との交流会については、外部団体とのプロジェクトであることから、参加人数を大幅に増やすことは難しい。しかし、希望する生徒を増やし、その内容や体験を還流することで学校全体としての取組にすることは可能であると考えられるため、継続して取り組んでいきたい。
生徒会活動	<ul style="list-style-type: none"> 生徒会活動を通して、望ましい人間関係を形成し、集団や社会の一員としてより良い学校生活づくりに参画し、協力して諸問題を解決しようとする、自主的・実践的な態度を育てる。 生徒会活動の計画や運営 異年齢集団による交流 生徒の諸活動についてのICT活用 学校行事の運営・協力 ボランティア活動などの社会参加 	<ul style="list-style-type: none"> 学級⇄生徒議会⇄生徒会執行部で情報の共有・発信し、組織的な取組を進めていく。 生徒会だよりによる活動の情報共有を行う。 生徒会活動においてICTの活用を広げる。 学校行事における計画・運営等の生徒会活動の活用を推進する。 	<p>【成果】</p> <ul style="list-style-type: none"> 生徒議会の際には毎度クラスの様子を交流する機会を設け、学校全体として取り組みの方向性を確認できた。 ロイロノート内に生徒会用の共有ノートをつくり、目安箱を設置したことで、生徒一人ひとりからの意見が吸い上げやすくなった。また、活動の共有や連絡などをしやすくなることができた。 体育祭や文化祭・附中のハーモニーなどの運営を中心に、執行部が中心となって計画・実施ができた。 新潟大学附属中学校主催の交流会や、青少年赤十字中学連絡協議会に参加し、本校の活動を全国や県の中学校に発信するとともに、各校の生徒と交流を深めることができた。 <p>【課題】</p> <ul style="list-style-type: none"> 執行部員は、現在取り組んでいるあいさつ運動を附属小学校とともに取り組む形にしていきたいと考えているが、打ち合わせが進んでいない。 ロイロノートをさらに有効に活用していく手立てを考える必要がある。 校則の見直しや、縦割り行事の企画など、執行部としては取り組みたい活動が沢山あるが、学校全体の動きや様子から取り組みを精選し、計画的に進めていく必要がある。 	<ul style="list-style-type: none"> 体育祭など学校行事における生徒の姿にいつも感動させられる。附中の基本理念である「つながりあう個」の観点からも、これらの取り組みを大切に継続していただきたい。 生徒会活動は、今後社会人として民主的な社会を支えていくうえで大切な資質を育む場であると考え、生徒が学校行事に主体的に参画する機会が保障されている様子を好ましく思う。 対外的な活動での成果と校内生活の質の向上等の地道な取り組みの両立を望む。特に現在取組中のあいさつ運動については「気持ちのよいあいさつをしている」と自信をもっている生徒を増やせるよう附小と共に進めていけるように期待する。 	<ul style="list-style-type: none"> 生徒会執行部としての活動、各活動部としての活動を見直し、よりよい学校生活創りに取り組んでいきたい。 県教委主催の「いじめSTOP動画」について、執行部だけの活動になっていたが、仲間づくりの視点からも全体で考える機会をとりたい。 赤十字連絡協議会やトレセンなどにも生徒が積極的に参加できるように周知していく。 「あいさつ運動」については、小学校と連携した活動がスタートした。これを機会に、「気持ちのよいあいさつ」について全校生徒で考え、実行できたり、検証できる活動にしていく。
開かれた学校づくり	<ul style="list-style-type: none"> 学校評議員会(兼 学校関係者評価委員会)を開催し、学校関係者評価を行い、学校運営の改善につなげる。 各種通信の発行とその伝達が確実にできる環境整備に努める。 学校HPの更新に努める。 	<ul style="list-style-type: none"> 学校評議員会を年3回開催し、学校運営に関する意見を集約する。また、PDCAを機能させ学校関係者評価や学校自己評価の活用を行う。 各種通信による情報発信とメール配信の効果的な活用を努める。 生徒・保護者の学校アンケート等結果の公表による情報提供を行うとともに改善につなげる。 HPの更新作業が出来る職員を各学年1名以上とする。 	<p>【成果】</p> <ul style="list-style-type: none"> 年3回の学校評議員会での意見を職員会議や運営委員会を通して、その内容を職員に周知し、改善につなげることができた。 HP活用による進路通信の発信や各種たより、きずなネットの活用によるメール配信など情報発信を昨年度より増やすことができた。 <p>【課題】</p> <ul style="list-style-type: none"> HPの更新作業ができる職員を増やすことができていないため、担当をより明確にし更新作業ができる職員を増やしたい。 ロイロノートの使い方や問題が生じたため管理職による管理ができない情報発信について今後もチェック体制を構築しなければいけない。 	<ul style="list-style-type: none"> 生徒がデジタルツールに精通していく一方で、教職員がHPの更新に手間取っている状況があるとすれば、速やかに改善されるべきものと考えられる。授業準備や研究活動、生徒と向き合う時間の確保等、先生方に時間的ゆとりがないことは理解するが、附属中学校は県内中学校の範となるべき存在なので、開かれた学校づくりにもなお一層注力してください。 タイムリー且つ必要な情報を適切に配信していただけるよう今後も工夫をお願いしたい。 	<ul style="list-style-type: none"> HPの活用を通して学校活動の発信を推進するため、各学年に最低2名はHPを更新できる職員を配置する。 教員がデジタルツールを有効に活用できるよう研修会を実施する。